第5回電気絶縁材料シンポジウム開催にあたって

絶縁材料管理専門委員会委員長　犬 石 嘉 雄

本年も9月18，19の両日にわたって第5回電気絶縁材料シンポジウムが電気学会絶縁材料管理専門委員会の主催のもとに東京で開催されることになった。これはひとえに多数の関係者の御協力と会員各位の暖かい御支持のおかげであり、主催委員会を代表して心から御礼申し上げたい。

昨年のDakin 博士の招待が多数の方々に歓迎され極めて有益であった。一方帰米後の博士の御尽力によって昨年度のシンポジウムの内容がI．E．E．E．のTransactionsに掲載されることになり、日本の絶縁グループの世界的評価を高める結果となった。このような点から本年は米国Du pont 社のMcMahon 氏にトリーに関する招待講演をお願いすることとなった。御存じのように、氏はトリー研究のパイオニアであり、I．E．E．E．のTrans. Electrical Insulation の editor として米国絶縁グループの有力なメンバーでもあるので、いろいろな意味で我国の絶縁グループのために極めて有益であると考える。招待を快よく承諾された氏に謝意を表したい。

来日のついでに、関東、関西、東海の各支部でも適当な形の公開講演会を開いて広く会員諸氏の御要望に応えたいと考えている。尚McMahon 氏の来日は後述のように関係業界各社の御援助によって可能になったことを記して謝意を表しておきたい。

さて本年のシンポジウムの特集題目としては種々検討の結果“エポキシ絶縁材料”，“油浸紙絶縁とプラスチック絶縁”，“低温絶縁”の三件が採り上げられ、一般部門の“絶縁材料の諸問題”と共に計4 session がもたれることになった。以上の件で公募の結果内容的にはいづれも充実した約43件の申し込みがあった。

昨年申し上げたように本年は (i) parallel session を設けないこと，(ii) 充分な討論時間をとること，(iii) 出席者に過重な負担をかけないことの3点を考えながら収容件数をふやすことをいろいろな角度から検討した。その結果、今回は第1日目（18日）の夜に1セッション設け、会期は従前通り2日間として約35件の講演を収容出来ることとなった。

本年も絶縁材料専門委員会委員の手数でプログラム編成委員会を構成し、数回の会合で慎重に検討の結果35件を本シンポジウムで、残り8件を9月5日東京で開催される第2シンポジウムともいうべき絶縁材料研究会で発表願うことにして各著者の御了承を得た。
今後とも我国の絶縁材料研究の進歩のために多数の方々がシンポジウムへ申込まれることを御願いしたい。

この機会をかりて本シンポジウムの役割について私見をのべさしていただくことにする。よく云はれるように我国の技術レベルの向上と輸出力の向上は、いろいろな意味で世界的なreaction を巻き起している。長期的にみるとこの reaction barrier をのりこす道は我国で開発された独創的な技術に基く独創的な製品、技術を輸出する以外にはないと考えられる。

従来外国の学会に目をむけていた基礎研究グループと、外国の業界からの技術輸入に努力してきた業界の技術グループが、我国自体の技術のneedsを中心に結集し、互に相手方を尊重しながら交流するところに独創的な技術の発展の芽があると信じている。
この意味で本シンポジウムが大学、公立研究所の研究者を中心とする基礎研究グループと、業界各社の技術者を中心とする開発グループのうちとけた交流の場として確立されることが我国絶縁技術の長期的発展の上に極めて大きい意義をもつものと考えられる。

また、その内容がI.E.E.E.誌上などを通じて世界に周知されることが我国に対する各国のイメージを改めることにも通じると信じている。

最後に本シンポジウムの最大のねらいは、絶縁に関係する電気、物理、化学などの研究者、技術者を一堂にあつめ充分な討論時間をとっていろいろなトピックスについて活発な意見交流、討論をはかり、問題意識を明確にするとともに次の新しい躍進の芽をそだてることにあるといっても過言ではない。参加者各位の積極的な討論参加をお願いしておきたい。

第5回シンポジウムの実現に努力された絶縁材料常置専門委員会の委員氏名は下記のとおりである。（敬称略，五十音順）

〔幹事〕　家田正之、矢作吉之助

〔委員〕　井関　昇、岡本英夫、加子泰彦、金指元憲、川井栄一、河野照哉、堺　孝夫、内藤克彦、能登文敏、原　仁吾、堀井憲爾、松浦虔士、吉岡　浩

〔幹事補〕　伊東宇一、田中紀捷